

3人の作家にみる「壁」

園田 健二

Melvilleの“Bartleby”(1853), Dreiserの*An American Tragedy*(1925), Hemingwayの“Indian Camp”(1925), “The Killers”(1927)には小説技法の1つとして「壁」(wall)が効果的に使われているようである。以下どのように効果的に「壁」が使われているかをみるのが本稿の目的である。

“Bartleby”という不思議な短編は一体何を表しているのであろうか。安楽な人生を最高とし、日常生活の表層しか見ようとせず、小市民としての自分に満足している語り手が、Bartlebyという極端に生きる人間とかかわりあうことにより、人間存在の本質的な孤独性や悲しさについて目覚める物語とも言えるし、Bartlebyが芸術家を表していると考えれば、語り手や、TurkeyやNippersやGinger Nutの世界は実業の世界であり、常識の世界であり、Bartlebyが体現しているのは文学の世界、非常識の世界である。そして、この物語は決して世にいれられることのなかった文学者の悲劇の物語ということになる。更に、この文学者をMelvilleと同一視できるかもしれない。また、“Bartleby”は「語り手が絶対的な孤独者としての主人公をいかに徹底して理解できなかったかのドラマ化である」¹とも考えられるが、しかしこの場合少し気になるのは、自分からは絶対話そうとせず、話す場合もただ返事に答えるだけで、自己を決して釈明しようとしないうような人物を理解するのは語り手に限らず、誰にでもでき

ないのではないかということである。この物語はまた、Bartlebyのように周囲と絶対に妥協しないで、周囲とのかかわりをいっさい拒み、極度に自己に忠実に生きる人生を押し通そうとすれば、結局はその人は挫折するしかないということを述べている物語であるというふうにも理解できる。この場合、Bartlebyは特に、その周囲との絶対的な非妥協性においてCaptain Ahabと共通する部分がある。そして、「壁」はもちろんBartlebyの絶対的な孤独性や非妥協性と関係がある。

“Bartleby”では語り手のオフィスはニューヨークのその名もWall Streetのビルの2階に設定されている。オフィスの両端とも高い壁に面していて、そとに見えるものはただ壁だけである。こういう風景に活気などはない。²

My chambers were up stairs, at No.—Wall Street. At one end, they looked upon the white wall of the interior of spacious sky-light shaft, penetrating the building from top to bottom.

This view might have been considered rather tame than otherwise, deficient in what landscape painters call “life.” But if so, the view from the other end of my chambers offered, at least, a contrast, if nothing more. In that direction, my windows commanded an unobstructed view of a lofty brick wall, black by age and everlasting shade; which wall re-

長大医短紀要 3: 27-32, 1989

長崎大学医療技術短期大学部 一般教育

quired no spy-glass to bring out its lurking beauties, but, for the benefit of all near-sighted spectators, was pushed up to within ten feet of my window-panes. Owing to the great height of the surrounding buildings, and my chambers being on the second floor, the interval between this wall and mine not a little resembled a huge square cistern.

導入部のこの部分は高い壁に囲まれている様子や活気のなさや沈鬱な雰囲気などから、どこか刑務所の高くて厚い非情な壁や、更には、墓場を連想させるところがある。つまり、作者はすでに小説の冒頭において、Bartlebyが結局は入ることになり、そしてまたそこで死ぬことになる刑務所の雰囲気を出そうとしていると言っている。あるいはまた彼にとって現実世界そのものが刑務所であり、墓場であるということを考えれば、この導入部はとりもなおさず Bartleby の心象風景を表しているとも言えるであろう。

Bartleby はニューヨークに来る前はワシントンの郵便局の本局の配達不能郵便課 (Dead-letter Office) に勤めていた。Dead-letter Office は dead-letter (配達不能の郵便物) を取扱い、焼却するところであるが、Bartleby がこういうところに勤めていたというのはどういう意味であろうか。それは彼がこの次についたコピーという仕事も含めて、将来への希望も全くない出口なしの絶望的な状況で、生命を燃焼させる創造的な仕事を何らすることなく早死したということを暗に言っているであろう。

コピーの仕事についていえば Bartleby は当初は熱心に仕事に精をだす。しかしこれもあくまで1人でしていた時に仕事に精をだしたのであって、3日めから他人との協同作業が始まると、彼は何を頼まれても、“I prefer not to.”と言って拒絶するようになる。徹底した非妥協の態度をとる。また、この返事に

もみられるように彼は完全な否定の人間である。彼は“I prefer to...”とは絶対に言わない。そもそも願望が何ひとつないのである。もし願望があるとすれば、それは否定への願望とでも言うべきものである。彼は自己を否定し、他人との協力を否定し、社会の価値を否定する。否定の究極は当然死である。

Bartleby と語り手の間には仕切りが置いてあるが、この仕切りはもちろん Bartleby と外界を遮断する仕切りである。他人とのコミュニケーションの否定を象徴するものである。Bartleby は何もしないで窓際に立ち、ただ前の、窓のついてないビルの壁をじっと見て夢想にふけるようになる。

I remembered that he never spoke but to answer; that, though at intervals he had considerable time to himself, yet I had never seen him reading—no, not even a newspaper; that for long periods he would stand looking out, at his pale window behind the screen, upon the dead brick wall...

The next day I noticed that Bartleby did nothing but stand at his window in his dead-wall reverie.

...Bartleby remained standing at his window in one of his profoundest dead-wall reveries.

Bartleby はオフィスだけでなく刑務所でも他の人間に背を向けて、1人でただ壁を見つめて過ごす。食事も他の人と話すこともしない。

Being under no disgraceful charge, and quite serene and harmless in all his ways, they had permitted him freely to wander about the prison, and, especially the inclosed grass-platted yards thereof. And so I found him there, standing all alone

in the quietest of the yards, his face towards a high wall, while all around, from the narrow slits of jail windows, I thought I saw peering out upon him the eyes of murderers and thieves.

“I prefer not to dine to-day,” said Bartleby, turning away. “It would disagree with me; I am unused to dinners.” So saying, he slowly moved to the other side of the inclosure, and took up a position fronting the dead-wall.

“dead brick wall”や“dead-wall”のdeadは「窓のない」という意味であろうが、これはBartlebyに外界に開く心の窓がないということにも通じる。また、これにはdead-letterと同じく当然死のイメージもある。Bartlebyはさしづめdead manというところであろう。

Dreiserの*An American Tragedy*の主人公ClydeはAmerican dreamを過度に肯定、信奉した人間である。彼は成功の夢をあまりにも追求しようとしたために人間まで殺してしまう。その*An American Tragedy*の書き出しと最終章の始めは次のようになっている。³

Dusk—a summer night.

And the tall walls of the commercial heart of an American city of perhaps 400,000 inhabitants—such walls as in time may linger as a mere fable.

(Chap. 1)

Dusk—of a summer night.

And the tall walls of the commercial heart of the city of San Francisco—tall and gray in the evening shade. (Souvenir)
最初の引用に言及されている都市はキャンザスシティであるが、この小説の最初と最後はいずれも中都市の夏の夕暮れ時に時間が設定

してある。そしていずれにも都市のビルの高い壁が描かれている。この壁はいろいろ形を変えながらClydeの前にあらわれ、成功を追求するClydeにとってはその過程で種々の意味を持つ。Griffiths家の人々がその間で伝道に従事し、Clydeが屈辱に満ちた少年時代をその間で送るキャンザスシティのビルの高い壁は、最終的にはClydeが入れられることになるブリッジバーグ(Bridgeburg)の刑務所の独房及び幅30フィート、長さ50フィートの石とコンクリートと鋼鉄のオーバーン(Auburn)の死刑囚の独房につながっている。また、Clydeが次に見るキャンザスシティの高層ビルの中の空は、オーバーンの刑務所の独房の天井の天窗(skylight)が見える青空につながる。つまりDreiserはすでに小説の冒頭においてClydeがやがて犯罪を犯し、刑務所に入るだろうということを暗示しているのである。これは“Bartleby”の場合とよく似ている。しかしBartlebyが「何の行動もなく」刑務所に入れられたのとは異なり、Clydeは少なくとも「何か行動があって」投獄されたのが違う。刑務所の高い、厚い壁は2人にとって、社会との断絶の象徴であると同時に敗北の象徴であり、挫折の象徴である。

*An American Tragedy*において最終的に壁は刑務所の壁となるが、その前に壁がいくつかClydeの前にそれぞれの意味を持ちながらあらわれる。まず壁はClydeにとって、権力と成功の象徴であるということである。シカゴのホテルで偶然知り合った彼の叔父の所有する会社は赤レンガのビルであり、このビルの高い壁の前に立った時、彼はそう思う。

...the high red walls of the building suggested energy and material success, a type of success that was almost without flaw, as he saw it. (Bk. 11, Chap. 5)

次に壁はClydeにとって身を守ってくれる壁であり、砦である。ブリッジバーグの裁判所においてClydeを尋問するJephsonは

Clydeに強い非難の目を向ける傍聴席に集まった人々とClydeとの間のいわば壁と砦の役割をする。

Yet in order to reassure Clyde and to make him know each moment that he was there—a wall, a bulwark between him(Clyde) and the eager, straining, unbelieving and hating crowd—he now drew nearer....(Bk. 111, Chap. 23)

更に壁はClydeにとって乗り越えなければならぬ障害物としての意味を持つ。オーバーン刑務所の壁はClydeと社会とのコミュニケーションを絶つものであるが、上告の結果を待つ母親は、“Are there walls against the Hand of the Lord?”(Bk. 111, Chap. 29)と行って励ます。

Dreiserは自然主義の作家であるが、HemingwayはMelvilleと同じく象徴主義の作家であるというふうにも言うことができよう。「壁」は実はHemingwayの初期の作品に出てくる象徴なのである。

“Indian Camp”は一方ではNickがインディアン女の帝王切開や赤ん坊の誕生やインディアンの女の自殺を目の当たりにして、人間の誕生や苦しみや死といった事実に目を開くといったふうに、Nickの開眼の物語でもあり、Nickのイニシエーションの物語でもある。この物語はインディアンが医者であるNickの父親をボートで迎えに来たところから始まる。Nickの父親はNickを連れてさっそくインディアンのボートにのる。インディアン女の陣痛が始まっていて、しかも難産であるためにNickの父親を呼びに来たのであった。インディアンの野営地に行くと、テントの中に2つベッドがあり、下の方のベッドには女の方が、時々うめきながら寝ていた。一方上のベッドには女の夫が寝ていて、男は斧で足に深手をおって、タバコをすっていた。この時男は別に壁の方を向いているのでもなく、何かを言うのでもなかった。Nickの父

親はさっそく手術の準備にとりかかる。女の叫び声がし、父親は麻酔薬はないと言い、女の叫び声は重要ではないという。丁度この時上のベッドに寝ていた夫が壁の方に寝返りをうつ。(“The husband in the upper bunk rolled over against the wall.”⁴⁾手術の準備ができ、Nickは洗面器を持ち、4人の男が女を押さえ、父親は麻酔なしで、ジャックナイフで手術をする。やがて赤ん坊を取り出し、腹部を縫い合わせる。すべてが終わって父親が上のベッドの夫を見ると、夫は壁を向いたまま、のどをカミソリで切って死んでいた。

He pulled back the blanket from the Indian's head. His hand came away wet. He mounted on the edge of the lower bunk with the lamp in one hand and looked in. The Indian lay with his face toward the wall. His throat had been cut from ear to ear. The blood had flowed down into a pool where his body sagged the bunk. His head rested on his left arm. The open razor lay, edge up, in the blanket.

この場面は凄惨な場面であるにもかかわらず、例によってそういう意味の語は1語もない。副詞も形容詞も極端に少ない。感情は表面に出ず、事実だけが簡単な語で淡々と述べられている。

“Indian Camp”ではインディアンの夫が、妻が苦しむのをそのまま見ていられず、自殺する過程が、壁を向くといったなにげない行為で巧みに表されている。壁を向くことは現実に背を向けることであり、壁は挫折、敗北の象徴である。

“Indian Camp”の2年後に書かれたHemingwayの短編に“The Killers”というのがある。この短編は2人の殺し屋がただ彼らの友人に報いるために、会ったこともないOle Andresonという人物を殺すために、よく

Andreson が出入りしている Nick の食堂にやって来るという話であるが、この短編も一方では、"Indian Camp"と同じく、Nick が人間の暴力や死に目覚めるという開眼の物語であり、イニシエーションの物語である。ここでは「壁」はどうなっているかみてみよう。

2人の殺し屋は Andreson を殺そうとする前に何事もないかのように平然と食事をする。ここが殺し屋の殺し屋たるゆえんであり、プロのプロたるゆえんである。しかし食堂で殺そうと思っていた Andreson はいつもの来る時刻が過ぎててもやって来ない。業をにやした殺し屋は直接 Andreson がいる下宿屋に出かけるべく食堂を出る。殺し屋が来ないうちに Andreson に知らせようと Nick は急いで Andreson の下宿屋に言って、殺し屋が来ることを彼に知らせる。Ole Andreson は寝ていたが、Nick の話を聞いてもベッドから起きたり、あわてたり、逃げようとしたりするどころか、何も言わず、ただ壁を見たり、壁の方に寝返りをするばかりである。Hemingway はここで1ページばかりのところに6回「壁」を登場させて次のように描写している。⁵

"I was up at Henry's," Nick said, "and two fellows came in and tied up me and the cook, and they said they were going to kill you."

It sounded silly when he said it. Ole Andreson said nothing.

"They put us out in the kitchen," Nick went on. "They were going to shoot you when you came in to supper."

Ole Andreson looked at the wall and did not say anything.

"George thought I better come and tell you about it."

"There isn't anything I can do about it," Ole Andreson said.

"I'll tell you what they were like."

"I don't want to know what they were

like," Ole Andreson said. *He looked at the wall.* "Thanks for coming to tell me about it."

"That's all right."

Nick looked at the big man lying on the bed.

"Don't you want me to go and see the police?"

"No," Ole Andreson said. "That wouldn't do any good."

"Isn't there something I could do?"

"No, There ain't anything to do."

"Maybe it was just a bluff."

"No. It ain't just a bluff."

Ole Andreson rolled over toward the wall.

"The only thing is," he said, talking toward the wall, "I just can't make up my mind to go out. I been in here all day."

"Couldn't you get out of town?"

"No," Ole Andreson said. "I'm through with all that running around."

He looked at the wall.

"There ain't anything to do now."

"Couldn't you fix it up some way?"

"No. I got in wrong." He talked in the same flat voice. "There ain't anything to do. After a while I'll make up my mind to go out."

"I better go back and see George," Nick said.

"So long," said Ole Andreson. He did not look toward Nick. "Thanks for coming around."

Nick went out. *As he shut the door he saw Ole Andreson, with all his clothes on, lying on the bed looking at the wall.*

ここでも例によって感情を表す語は全然見当たらない。ただ事実だけが淡々と述べられている。

“The Killers”ではこのように“wall”という語が頻繁に使われていることにより、Andreson がすべてをあきらめきっているという様子や彼の無気力な心的状態がよく表れている。“Indian Camp”の場合と同様，“The Killers”でも壁を向くという Andreson の行為は現実に背を向けることであり、殺し屋との対決から逃避することである。壁は彼にとっても挫折と敗北の象徴である。

以上、Melville, Dreiser, Hemingway において“wall”がどのように表れているかを彼らの短編から断片的にみてきたが、この点で3者の影響関係を裏付けるものはもちろんない。しかし3者3様にこの題材を巧みに扱い、これが象徴として概ね共通する意味を持っているのは興味深いことである。

(注)

1. 杉浦銀作『メルヴィル』(冬樹社, 1981年), 131 ページ。
2. “Bartleby”からの引用は Jay Leyda, ed., *The Portable Melville* (1952; New York: The Viking Press, 1978)による。
3. *An American Tragedy* からの引用は *An American Tragedy* (New York: The New American Library, 1964)による。
4. “Indian Camp”, “The Killers”からの引用は Ernest Hemingway, ed., *The Short Stories of Ernest Hemingway* (1925; New York: Charles Scribner's Sons, 1966)による。
5. イタリック体は筆者。

(1989年12月28日受理)